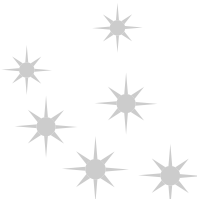


表紙に掲げられた資料の解説



DICKENS, Charles
The Posthumous Papers of the Pickwick Club
London, 1837

ディケンズ『ピックウィック・ペーパーズ』



チャールズ・ディケンズ(1812～1870)は、イギリス南岸のポートシー郊外に海軍経理部の書記の子として生まれた。間もなく一家はロンドンに出たが、彼の少年時代に家計が悪化し靴墨工場で働いて収入を得たという。この経験が、小説家としての人物形成に影響を与えたといわれている。

ディケンズが英国最大の小説家として文学史上に名を残すようになったのは、彼のすぐれた創造性や、機知とユーモア、さらには哀感に富んだ描写にある。そして、作者ディケンズは常に大衆の味方となり、自分の経験をよりどころとして、作中の人物として生きているのである。

『The Posthumous Papers of the Pickwick Club, edited by Boz, 1836-1837』通称『Pickwick Papers』は、ディケンズの最初の本格的長編で、これによってディケンズは彼のペンネーム“Boz”と共に、一躍、有名作家となった。この作品は、1836年4月から翌年11月にわたり、分冊で発表され、挿絵は漫画家のRobert Seymourが描いた。しかし、Seymourの自殺後はBussやBrowne(Phiz)という人物がこれに代わった。

登場人物は約300名にのぼるが、ピックウィック・クラブ(Pickwick Club)という奇妙なクラブの会長Pickwick氏を中心に、Tupman、Snodgrass、Winkieの4人の会員が、通信部を組織して旅に出て、旅先の見聞や遭遇した事件をクラブに報告した記録形式の旅行記で、愉快な事件が次々と展開する。

本書は分冊をまとめて1837年にロンドンで出版されたもので、本学図書館にはこの初版本の完全なセットが所蔵されている。(写真はその一部)

『洋書百選』(1972年 本学図書館刊行)より抜粋し、加筆

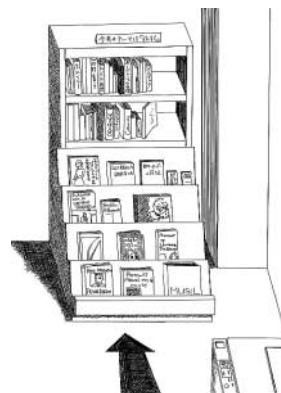
7～9月のピックアップコーナー

『球技』

皆さんの中で、球技をプレーしたり、観戦したりしたことがないという人はほとんどいないでしょう。球技大会でバレーボールやバスケットボールをしたり、野球やサッカーの試合を見て、好きなチームを応援した経験は一度はあるのではないのでしょうか。球技には大変多くの人々を魅了する力があります。

特に、今年の5月末から6月にかけて、サッカーのワールドカップが日韓共同開催で行われ、大変な盛り上がりを見せました。サッカー

についての文献をいろいろ調べられた方も多いことと思います。今回のピックアップコーナーでは「球技」を取り上げてみました。皆さんも、球技の本を読んで、興味のある球技に関する知識を少し深めてみませんか。



情報サービス課 石美 真也